

多民族・多文化都市ニューヨークにおける芸術の役割

黒人映画、サーカス、ゴスペル、コンセプチュアルアート、パブリックアートの 5 つの断面から

—スパイク・リー作品『Do the right thing』(1989)を巡って—

表象文化コース 後藤ゼミ所属

15AR003 伊津野菜

◆目的

多民族・多文化都市であるニューヨークには、ブルックリン、ブロンクス、ハーレムなどの黒人地区が多数存在している。15 世紀から始まったアフリカ黒人奴隷制度はその後 300 年以上に渡り続き、今でも黒人差別という重圧の下に黒人たちは置かれている。白人たちに虐げられてきた怒りを持ちながら、しかし白人社会の中で生きていかねばならないというこの 2 つの矛盾した関係を持ち合わせている。そのために、黒人文化というものは、ほかのどの文化とも違う微妙な問題を抱えているのではないだろうか。

とくに私が関心を持っているのが、1 年次から研究を続けてきた「黒人映画」である。2 年次からはスパイク・リー (Shelton Jackson "Spike" Lee, 1957 年 3 月 20 日-) という、黒人映画監督の作品に焦点を絞り研究してきた。彼の作品は、麻薬、売春、人種差別など、黒人を取り巻く問題を取り扱ったものが多い。例えば『School Daze』(1986)というアトランタ南部のミッションスクールを舞台とした作品では、白人に憧れ白人のように振る舞う黒人グループと、黒人差別に反対し白人を嫌悪する黒人グループの対立を、ユーモアを交えながら描いている。スパイク・リーはこの映画に対して「私が試みたのは、黒人同士を分裂させている問題がいかに表面的で些細なことかを示すことだった。」と発言している。そしてこの映画のラストシーンでは、対立するグループのリーダー 2 人が和解した後、カメラに向かって (つまり、観覧者に向かって) 「Wake Up」と語りかける。

この「目覚めろ」という強いメッセージは、彼の他の作品にも一貫して存在している。私は研究を重ねてきた中で、スパイク・リーは「自身のアイデンティティに目覚めろ」と言及しているのではないかと考えている。『School Daze』の次の作品である『Do the right thing』(1989)の舞台は、ブルックリンである。スパイク・リー自身も長く住んでいたことのあるこのブルックリンを中心に巡り、黒人文化に直に触れることで、卒論テーマである「黒人のアイデンティティ」について考察を深めたい。

◆目的地

アメリカ合衆国 ニューヨーク / ブルックリン・ハーレム

◆日程

出発予定日 2014年1月30日 帰国予定日 2014年2月10日		旅行予定日数（発着日含む） 12日間	
日数	月日	滞在地	行動内容
1	1/30	福岡 成田 ニューヨーク	福岡空港(07:20 発) 成田経由(9:00 着 11:10 発) JFK 空港 (1/30 10:05 着)
2	1/31	ニューヨーク	ニューヨーク近代美術館見学
3	2/1	ニューヨーク	ブルックリン散策 40 Acres and a Mule Filmworks を訪れる
4	2/2	ニューヨーク	ハーレム散策 アビシニアン・バプテスト教会で礼拝に参加
5	2/3	ニューヨーク	大雪のため宿泊先待機
6	2/4	ニューヨーク	ニューヨーク市立博物館、 グッゲンハイム美術館を見学
7	2/5	ニューヨーク	マディソン・スクエアガーデンを見学
8	2/6	コネチカット州 ブリッジポート	バーナム博物館見学
9	2/7	ニューヨーク	ショーンバーグ黒人文化センター訪問 ブルックリン散策 ブロードウェイにて STOMP を観劇
10	2/8	ニューヨーク	ショーンバーグ黒人文化センター訪問 書店 STRAND で資料探し マンハッタン散策
11	2/9	ニューヨーク ボストン	予定便が関東地域の悪天候のため欠航 ボストンを経由
12	2/10	ボストン 成田	予定より 3 時間 30 分遅れで成田(20:00 着) 品川で一泊
13	2/11	羽田 福岡	羽田空港(7:10 発) 福岡空港(9:10 着)

◆調査結果

1. Do the right thing

研究旅行をするにあたって、スパイク・リーの初期の作品であり、ブルックリンを舞台に人種差別と対立を描いた『Do the right thing』を研究し、自分なりに読み解いた。

1980年代のアメリカは、ヒスパニック系の増加やそれ以外の移民の流入によって、複雑

《あらすじ》

舞台は夏のブルックリン、ベッドフォード・スタイベサント。ここは黒人とプエルトリコ系が大半を占める地区である。スパイク・リー扮するピザ屋の店員ムーキーと、その店主であるイタリア系白人サル。そこに住む人々の日常が描かれながら物語が進んでいく。

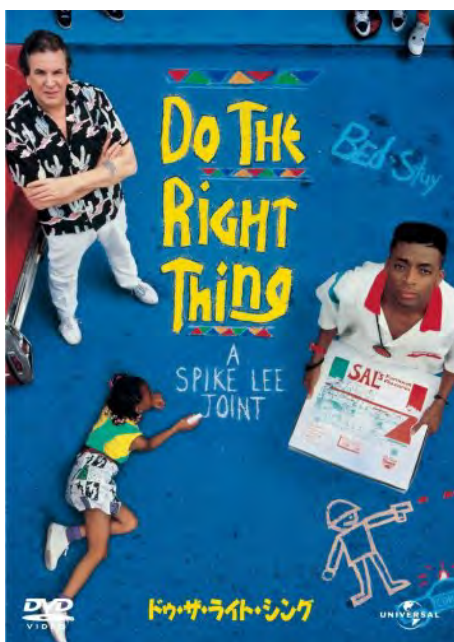
今年の夏はとりわけ暑く、続く猛暑に住人達はイライラしている。ある日、「サルの店の壁には白人の写真しか飾られていない」と、ある黒人の客が文句を言い、サルと口論になった。同じ日、サルは、店の前で大音量で音楽を流す別の黒人ラジオ・ラヒームに腹をたて、とうとう店の中で喧嘩が始まってしまう。ところが、それをとめるために駆けつけた警官が、誤ってラジオ・ラヒームを殺してしまう。こうなると収拾がつかなくなり、様々な人同士で喧嘩が始まってしまう。やがて喧嘩は暴動に発展。店に火がつけられ、オープンして20年経ち地元で馴染んでいたはずのピザ屋が、あっさりと燃え尽きてしまうのだ。

な状況にあった。黒人層自体も裕福層の増加に伴って、内部分裂も始まっていたのである。この映画は、そのような状況下に起きたある事件にインスパイアされている。1986年、黒人男性3人がクイーンズのハワード・ビーチにあるピザ屋を訪れたところ、イタリア系白人に「お前たちの来る場所じゃない」と追いかけられ、1人がバットで殴られ重傷、1人が逃げるために車道に出たところを車に轢かれ死亡してしまったのである。この事件は大きく報道され、黒人たちは連日ハワード・ビーチに足を運んだ。それに対して住人たちは、犯人釈放を求める声を上げていたという。また1991年には、スピード違反をした黒人男性を、白人警官が20人以上で暴行した、ロドニー・キング事件が起きた。この事件がきっかけでロサンゼルス市街では黒人による大きな暴動がおき、4000人を超える連邦部隊が投下されるほどの事態となったのである。

このような時代に作られた『Do the right thing』は、前述のハワード・ビーチでの事件にインスパイアされたという。この映画には、単純に黒人と白人という人種だけではなく、プエルトリコ系、韓国系、ユダヤ系と多くの人々が登場する。そしてそのすべての人たちは、互いに少しずつ文句があり悪口を言っているが、決して暴動を起こすほどの差別意識やパワーは持ち合わせていない。それぞれがそれぞれに思う「正しいこと（＝ライト・

シング)」をやりながら、平穩に過ごしていたのである。それを猛暑が少しずつ狂わせた。暑さによる苛立ちによって「ライト・シング」が少しずつ行き過ぎた結果、暴動にまで発展してしまう。致命的な差別が存在していたわけではないのに、結果だけ見れば単純な人種差別、という認識で語られてしまうような事件になってしまうのだ。

この作品のラストでは、キング牧師 (Martin Luther King, Jr., 1929年1月15日 - 1968年4月4日)の「暴力は役に立たない」と、マルコム X (Malcolm X, 1925年5月19日 - 1965年2月21日)の「自己防衛のための暴力は知性になりうる」という2つの言葉が引用されている。公民権運動では、この2人の方向性の違いが黒人たちの分裂を起こす原因ともなってしまった。しかし、笑顔で写る2人の写真を使ったスパイク・リーは、黒人同士の、そして人種間の結束は可能なのだと言っているように思う。正しいことをするのが、必ずしもいい結果を生むわけではないということを、スパイク・リーはこの作品で描いている。また、「Do the right thing」という言葉には、「まともになれ」という意味もある。スパイク・リーは、人種間闘争の起きる時代を目の前にして、まさに、「まともになれ」と非常に冷静に言い放っているのではないだろうか。



(左)Do the right thing のDVDパッケージ (右)スパイク・リー

2. スパイク・リーとブルックリンを巡って

ブルックリンは、マンハッタンの南東に位置し、ブルックリン・ブリッジ、マンハッタン・ブリッジ、ウィリアムズバーグ・ブリッジなどにつながっている。ニューヨークの5つの区の中で一番人口が多く、250万もの人々が居住しており、移民が多い。

私がまず訪れたのが、スパイク・リー自身が設立した映画会社である 40 Acres and a Mule Filmworks(図 1)である。1983 年に設立されて以来、35 本の映画を製作している。ブルックリンのフォートグリーン地区、赤いレンガのアパートが立ち並ぶ一角にあった。正面には映画会社のロゴがはいた旗が掲げられており、シャッターには現在制作中の映画『Da Sweet Blood of Jesus』のイメージが描かれている(図 2)。このイメージは制作中の映画によって毎回変わるようだ。扉には、スパイク・リーの手掛けたこれまでの作品の題名が書かれていた(図 3)。また、壁に飾られた鐘には「Wake Up」と描かれており(図 4)、このメッセージがスパイク・リーにとっても重要なキーワードであり、作品を読み解いていくヒントであるという確信を得ることができた。鐘は、『School Daze』のラストシーンで、主人公ダップがみんなを起こすためにかき鳴らす。スパイク・リーにとっても、『School Daze』は重要な作品だということだろうか。一切の取材を断られているため、中にはいることはできなかった。



(図 1)



(図 2)



(図 3)



(図 4)

ハーレムのショーンバーグ黒人文化センターでは、スパイク・リー関連の本、写真、映像を見ることができ、『Do the right thing』の撮影の様子を収めた資料があった。撮影地だと思われる場所の記録があったため、訪れることにした。ブルックリンのマルコム X ブルーバード通りとクインシー通りの交わった場所であった(図 5,6)。撮影は、レキシントン・アベニューとクインシー・ストリートの間で行われた様である。Kosciusko St 駅を降りて徒歩 10 分ほど。散歩中の人に聞いてみたところ、映画内で見ることのできたペイントされた壁などはすでに取り壊されているようであった。しかし、ここで撮影していたらいい、という場所を教えてもらうことができた(図 7,8)。



(図5)



(図6) 場所の書かれたバス停があったので。



(図7,8) 左が映画の中の1場面、右が実際に行って探した赤レンガの街並み。ブルックリンは赤レンガのアパートが立ち並び、映画内でも多く登場する。

街並みは完全に裏町といった感じでアパートが立ち並び、ビルはなかった。メインストリートは交通量が多かった。小学校や幼稚園が多く見られ、白人の姿はほとんどない。メイキング映像の中では、黒人スタッフがみんなを集めて「39日間常に危険と隣り合わせだ。警戒を怠らないように。」と注意する場面があった。『School Daze』のように、住人達が撮影を温かく見守ってくれない、ということらしい。実際、撮影の雑用の仕事を求めて群がる住人も映し出されていた。現在治安は良くなっているようであったが、1つ裏道にはいると少し荒れた様子も見られたため、注意が必要であった。

同じブルックリンでも、40 Acres and a Mule Filmworksのあるフォートグリーンとは少し様子が違う。フォートグリーンは近年高級住宅街になったらしく、道を挟んで反対はビ

ルの立ち並ぶ都会(図 9)、振り返れば古い建物が並ぶアパート街、という不思議な地区であった。人も、黒人と白人が入り混じっており、身なりもまちまちであった。マンハッタンへ続くブルックリン・ブリッジは多くの人々が行き来していた。スパイク・リーは、高級住宅地になる前のフォートグリーンで幼少期を過ごしていたそうだ。



(図 9)



(図 10)奥に見えるのはマンハッタンの夜景。

3. ハーレムと黒人文化

もう1つ私が散策したのが、ハーレムである。マンハッタン北部に位置するハーレム地区は、1920年代のハーレム・ルネサンスに象徴されるように、アフリカ系アメリカ人の文化とビジネスの中心地である。貧困から犯罪に走る者も多く、長い間危険な場所ともされてきた。現在は改善されてきているようであったが、裏道や遅い時間は注意が必要であった。

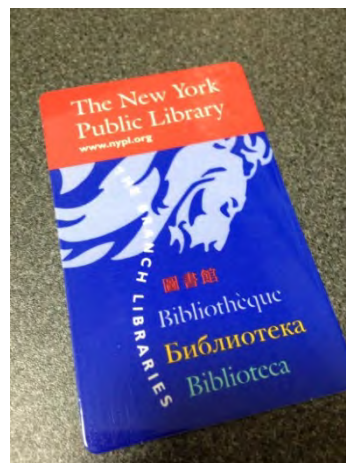
アビシニアン・バプテスト教会では、礼拝に参加することができた。会員が1万人を超える、アメリカでもっとも大きな教会の1つである。この教会の礼拝は観光客に人気で、特にゴスペルを観聴するために訪れる人は多い。開始1時間前に行ったが、すでに10名ほどの人が並んでいた。最終的には100人以上の人が並び、見学できない人も居たようである。教会の中にはいると、地域住民の参加者たちがすでに並んでいた。皆フォーマルな衣装に身を包んでおり、そのほとんどが黒人であった。奴隷制時代、黒人奴隷たちが独自に神へ祈るために生まれたというゴスペル(黒人霊歌)。現代では、観光客のための一種のエンターテイメントになっているのではないかと考えていた。しかし、実際参加して、地域の参加者たちが真剣に祈りを捧げる姿を見ると、彼らと「神」の関係の深さを実感した。スパイク・リーの作品でも、信仰深い役であったり、神に関係するモチーフであったりが使われている。生活に深く根付いた神への信仰を理解することも、研究していくうえでは必要だと感じた。

前述のショーンバーグ黒人資料センター(図 11)は、歴史学者アーサー・ショーンバーグが

寄贈した資料をもとに 1926 年に設立された。ニューヨークの公共図書館の一部で、アメリカのアフリカン・アメリカンを中心とした文化の資料が所蔵されている。書籍だけでなく、映像、音楽、絵画など多様で、その数は 500 万点を超える。資料を閲覧するためには、まずニューヨーク市立図書館のカード(図 12)を作る必要があった。手続きはパソコンを使い、10 分ほどで終わる。このカードがあれば、資料は自由に閲覧することができる。



(図 11)



(図 12)

ハーレムには、アフリカ系アメリカ人の著名な運動家・活動家の名前が付けられたストリートが存在しており、キング牧師とマルコム X の名をつけられたものもある。その 2 つの道がちょうど交差する場所があった(図 13)。同時期に公民権運動下で活躍し、人種差別の解決を望んでいた 2 人の中には、手段に大きな隔壁があった。暴力を否定したキング牧師と、防衛のための暴力を肯定したマルコム X。マルコム X は、キング牧師の姿勢を批判し、笑いものにしていた時期もある。しかしそのうち、自らの過激な思想の中核をなしていたネーション・オブ・イスラム教団に疑問を覚え、手を切った。運動家として新たなステップを求め、キング牧師との対談を望んでいたその年に、彼は暗殺されたのである。キング牧師はマルコム X の死を嘆き、「マルコム X の暗殺は悲劇だ。世界にはまだ、暴力で物事を解決しようとしている人々がいる」と語った。その翌年、キング牧師も暗殺されてしまう。生前のうちには交わることのできなかつた 2 人の道が交わっているのには、何か考えさせられるものがある。



(図 13)

◆研究旅行を終えて

2013年夏には、フランスの黒人文学者であるエメ・セゼールを中心に、フランスの黒人文化について研究するためにフランスへ渡り、語学研修に参加した。その時は、現地の大学に通いながら授業にも参加していたため、アフリカ系フランス人だけでなく、ドバイやエチオピアといった様々なルーツを持つ黒人の人々と触れあうことができた。彼らとの会話の中で、一言に「黒人」といっても様々なルーツがあり、文化も様々であるということを目の当たりにし、研究に関しても深く考察することができた。

今回の旅では、現地の人々と触れ合う機会があまり持てなかったのが残念だ。しかし、ニューヨークの町を歩くと、様々な場面で黒人文化に触れ、歴史を感じることもできた。例えばストリートの名前に「マルコム X」とつけられていたり、家の前にキング牧師の写真が飾られていたり、といった具合である。これはフランスではなかなか目にしない光景であった。アフリカ系アメリカ人の多くが、自分たちのルーツに並々ならない誇りを持っているのだということを感じた。黒人の持つ「パワー」に圧倒される日々だった。

そして一番の収穫だったのが、スパイク・リー本人と出会えたことである。最終日に、マンハッタンで買い物中の彼に偶然会うことができたのである。ほんの2～3分の出来事で、用意していた質問は聞くことができなかったが、「あなたの作品を研究している」という私に、「頑張って」と言ってくれた。スパイク・リーは過激な言動が目立つため、彼の作品は「黒人のためのもの」だと勘違いされやすい。しかし『Do the right thing』を見て分

かるように、彼は社会的・政治的な問題を非常に冷静な目で見つめ、黒人だけではない私たちすべてに「考えること」を要求しているのである。今後の研究では、これを励みにして、持ち帰った資料や経験をもとにより深く考察していきたい。

最後に、このような機会を下さった教育・研究推進課の金子さん、大久保さん、国際文化化学部の先生方、そして、後藤先生に感謝します。本当にありがとうございました。



スパイク・リーと。

◆参考文献

- 井上一馬(1998)『ブラック・ムービー アメリカ映画と黒人社会』講談社現代新書
佐藤忠男(1976)『映画をどう見るか』講談社現代新書
リー, S. 田中アリス訳(1993)『スパイク・リーの軌跡』マガジンハウス
Reid, A. (1993). *Spike Lee's Do the Right Thing*. America, Fireside.
Lee, S. Aftab, K. (2006). *Spike Lee: That's My Story and I'm Sticking to It*. America, W. Norton & Company.
McMillan, T. (1991). *Five for Five : The Films of Spike Lee*. America, Stewart, Tabori & Chang.